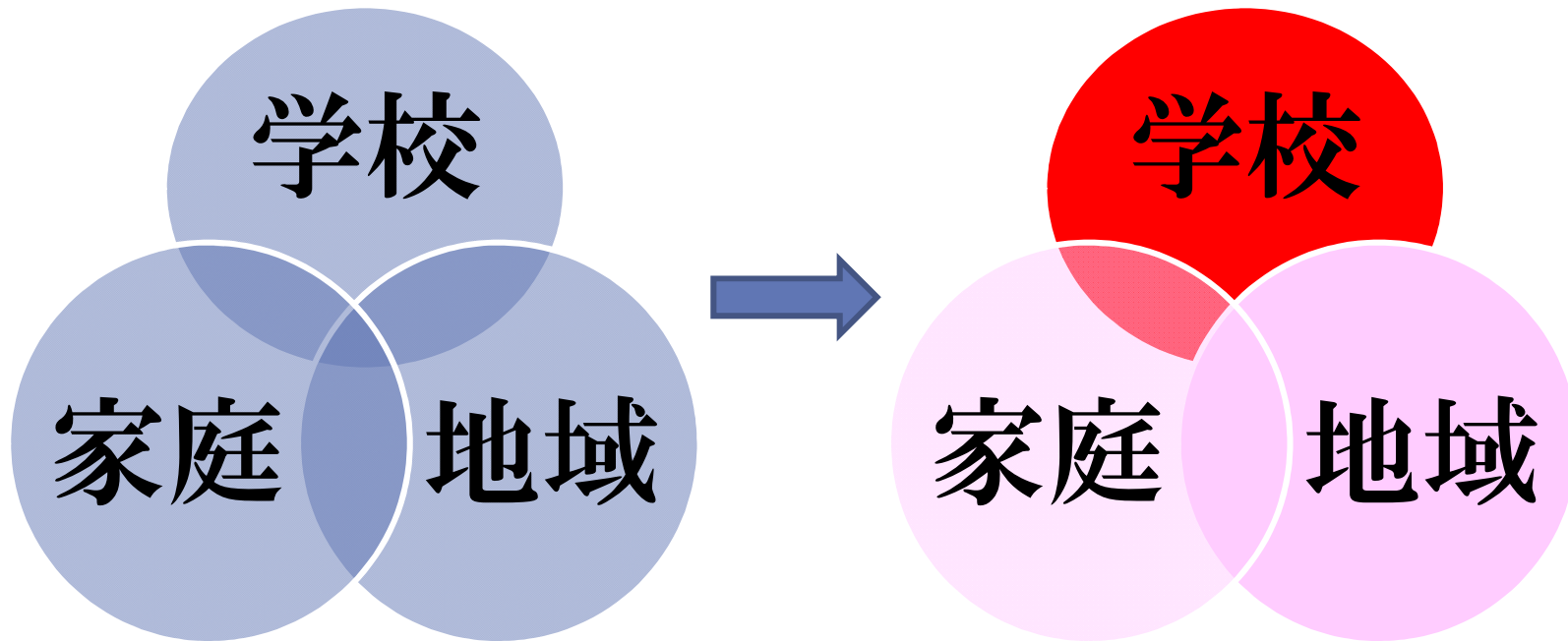


足立区における学力調査結果の 活用について

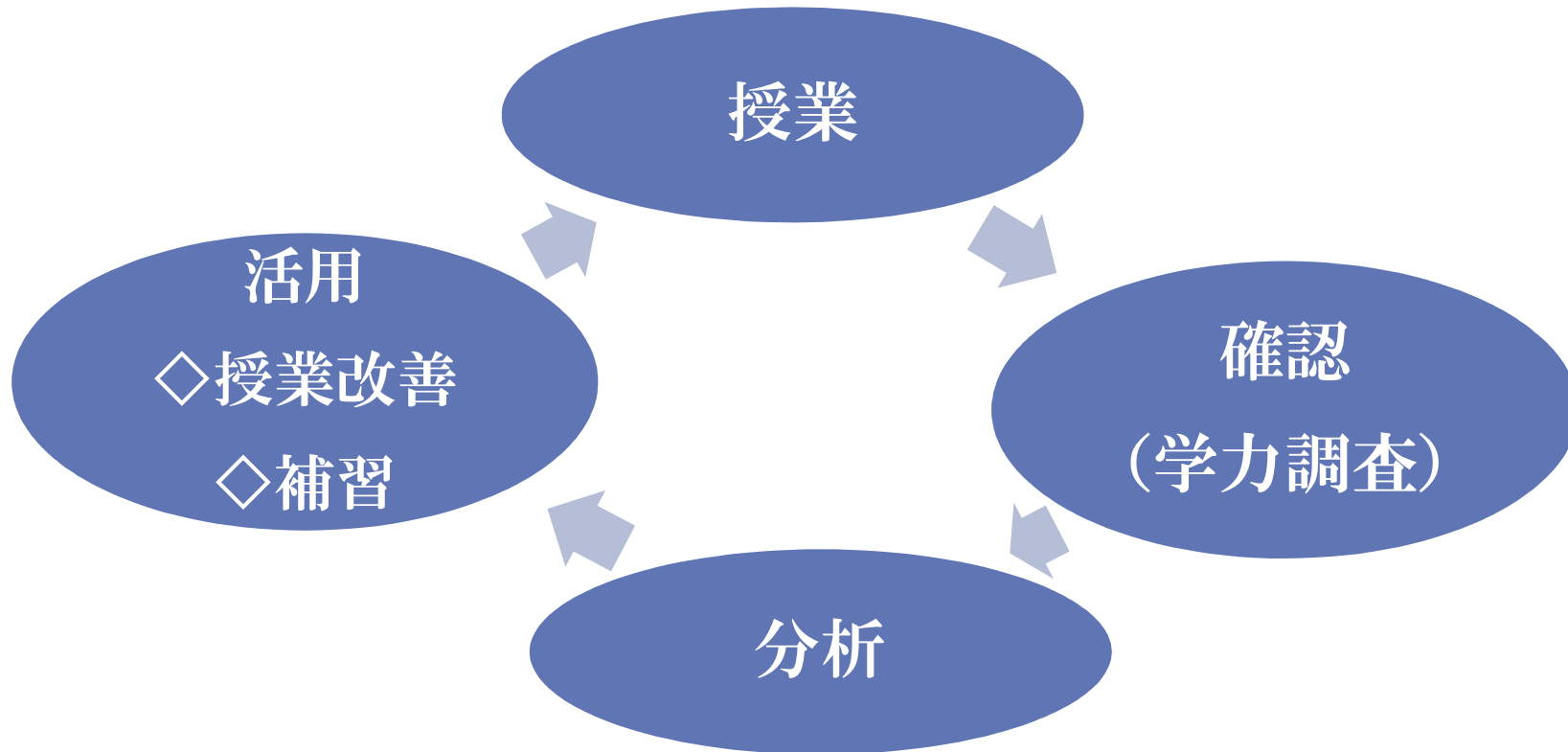
足立区教育委員会
学力定着推進担当



- ◆家庭・地域における「しつけ」「常識」「生活習慣」「安全」等の教育や多様な体験
 - ◆「子どもの貧困」ー学習機会や体験の希薄さー
 - ・就学援助率の高さ
 - ・通塾率の低さ
 - ・親の就業時間の長さ 等
- 学校にいる時間のみが子どもの力をつけるチャンス
- 公教育に求められる責任・役割

基礎的な学力の保証

基礎的な学力の保証のために



学力定着の状況を客観的に直視する必要

※ 授業だけでは完全に理解しきれない子どもは必ずいる

⇒ 「学力調査結果」は定着度の確認ツールとして活用
誤答から 「つまずき」の発見

⇒ 個に応じた指導、課題に応じた授業改善につなげられる

学力調査結果から何を求めるか

分析方法の共有

(1) S－P表分析

S : Student score (得点)

P : Problem score (正答数)

得点状況からは把握できない被験者の個々の問題における成就度や苦手意識などを把握することができ、きめ細かな個別指導の指針および指導の改善などに役立つ。



採点結果の分析から、クラスや学年といった集団での課題の傾向や、つまずきのある児童・生徒を見つけ出すことができる。

2 分析結果の活用 ①

補習対象者の選定

【ねらい】

SP表より課題のある児童・生徒対し、個に応じた対策を計画し、学力保障を徹底する。

各小中学校で、それぞれの定着度や教科によって補習を実施するほか以下の区の実施する施策については、定着度の状況を示し対象者を絞っている。

◇小学校 そだち指導、小学校基礎学習教室

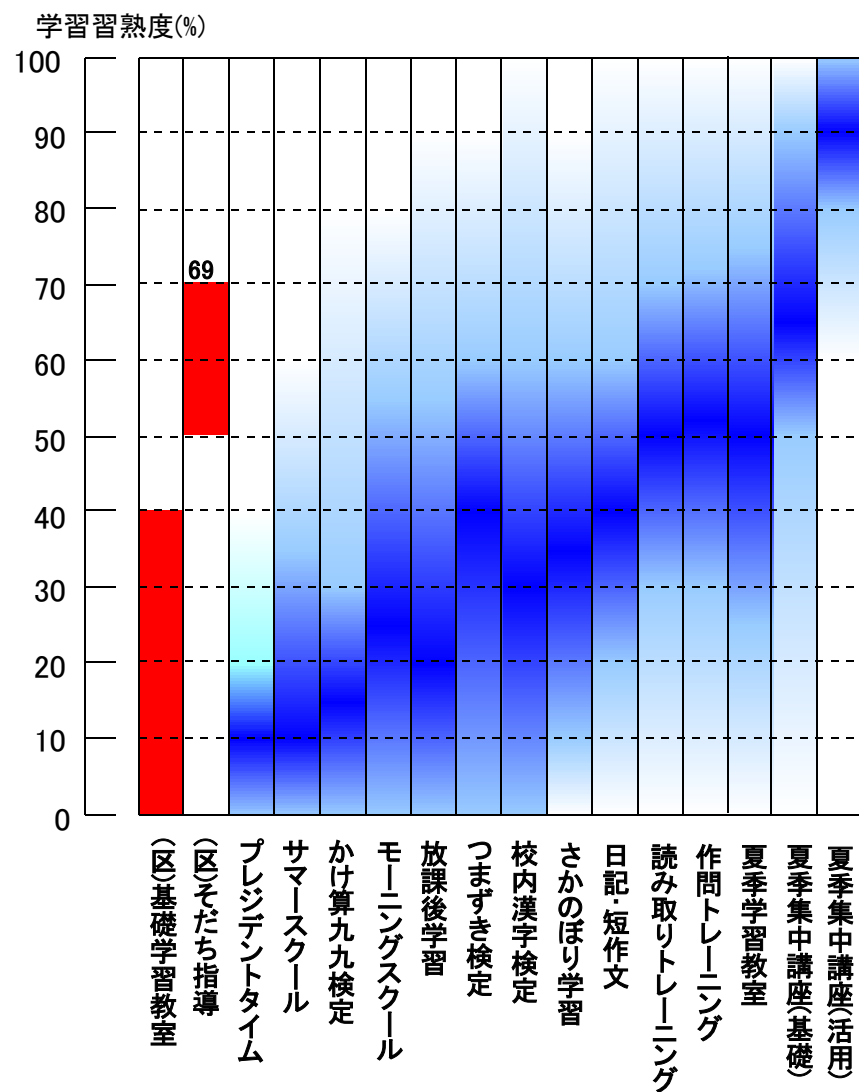
◇中学校 中1夏季勉強合宿、夏季補習教室、英語チャレンジ講座

- ① 意図的・効果的な個に応じた指導をすることができる。
→つまずきに応じた手段を選択できる。
- ② 対象者を絞ることで、実施する事業の効果があがる。
→事業ごとの対象者を絞りやすくなる。

弘道第一小学校における児童の学習習熟度に応じた各取組

■対象児童■

■取組一覧■



取組	めあて	実施時期・頻度等	対象(習熟度:%)
プレジデントタイム	特に個別指導を必要とする児童を担任が抽出し、児童の学習意欲・自信を引き出すとともに、基礎・基本の学力の定着を図る。	担当から予定が配布される。それに合わせ、当該児童は校長室でその時間学習する。(各学年週1時間程度)	0~20
サマースクール	つまずきが目立つ児童のつまずきを解消させる。	対象児童を抽出し、つまずいている内容を学習させる。	0~20
かけ算九九検定	かけ算九九を完全に習得させることで、計算力を向上させる。	2年生以上、6、11、2月の年間3回(2年生は2月に1回)	0~30
モーニングスクール	漢字・計算の反復学習を行い、基礎・基本の学力の定着を図る。	毎週水・木曜日の7:30~8:00	0~50
放課後学習	学習する環境を提供することで、児童が進んで学習する意欲を喚起するとともに、基礎・基本の学力の定着を図る。	毎週月・火・木・金曜日の放課後	0~40
つまずき検定	区調査において、正答率が低かった単元についての問題を作成し、練習および検定を行うことで、基礎・基本の学力の定着を図る。	すっきりタイムで実施 各学年3単元・3回/年(検定に向けての練習問題2回分を宿題などにし、指導してから検定を行う)	0~60
校内漢字検定	前学年の漢字の書き取りテストを行うことで、日常生活において適宜使う力を育てる。	すっきりタイムで実施 20回/年	10~60
さかのぼり学習	前学年までの算数で、つまずいている領域・内容を明らかにし、補充を行うことで、基礎・基本の学力の定着を図る。	火曜、金曜の朝の弘一タイムで実施 4分間の音読(群読など)の後、テキストを使い、8分間取り組む。	20~60
日記・短作文	「書く」習慣を身に付けさせることで、文章表現を豊かにさせる。	主に週末の宿題として取り組む。(年間50回以上)	20~60
読み取りトレーニング	文章を読み設問に対して正確に答えることによって、文章の内容を理解したり、自分なりの考えを表現したりする力を育てる。	当該学年分はきらきらタイムで、それ以外はすっきりタイムで実施 5、6年は宿題として取り組んでもよい。	30~70
作問トレーニング	式をもとに問題を作成したりお話を作ったりして、数学的な考え方の育成を図るとともに、自分の考えを表現するための助けとする。	主に週末の宿題として取り組む。長期休業中の宿題として取り組んでもよい。(年間10枚以上)	40~70
夏季学習教室	整った環境で自学・自習することで、基礎・基本の学力の定着を図る。	夏季休業中10日間	0~75
夏季集中講座(基礎)	つまずきが目立つ単元・領域について、重点的に学習を進めることにより、つまずきを解消させる。	夏季休業中4講座	50~80
夏季集中講座(活用)	習得した基礎・基本の学力を活用する力を育てる。	夏季休業中2講座	80~100

* 本校における取組は、「夏季集中講座」(活用)を除き、児童全員が対象の取組です。右表の「対象」は、この取組を通して、特に学習成果を期待している児童の習熟度の範囲です。

※きらきらタイム・・・国語、算数において、つまずきやすい学習内容で、指導計画に1時間プラスして行う。
 ※すっきりタイム・・・金曜5校時(1~3年生)または6校時(4~6年生)に実施。 当該学年の学習内容でない学習を行う。*年間30時間。

例) つまずき検定

【ねらい】

正答率が低かった単元・領域を特定し、問題を作成。問題練習および検定を行うことで、基礎学力の定着を図る。

- ① SP表から集団における課題が明確になっていることで、問題作成を経て実施に至るまでが円滑。
→つまずきを早期に解消することができる。
- ② 解けなかった問題だけをやり直すのではなく、学年をさかのぼって学び直すことができる。
→基礎学力の定着
- ③ 校内で情報を共有することで、苦手に陥りやすい単元の授業（調査実施対象の前学年）に工夫ができる。
→つまずきをつくらない（予防）

つまずき検定 5年③ 百分率とグラフ

- ① 小数で表した割合を百分率に、百分率で表した割合を小数で表しましょう。(各5点)

小数	0.35	1.54	③	④
百分率	①	②	38%	150%

- ② ある年の弘一小の子供の人数は、全員で340人でした。そのうち6年生は68人いました。学校全体の人数をもとにした6年生の人数の割合を求めましょう。(式・答え各5点)

式

(答え)

- ③ 今週、保健室を利用した人数は65人でした。そのうちけがをした子供は80%でした。けがをした子供の人数を求めましょう。(式・答え各5点)

式

(答え)

- ④ やすゆきさんは7500円貯金しています。これは目標の25%です。やすゆきさんが貯金しようとしているのは、いくらでしょうか。(式・答え各5点)

式

(答え)

- ⑤ ひろあきさんはくつ下を買うためにA店とB店に行きました。(式・答え各5点)

A店：定価500円のくつ下を80円引きで販売
B店：定価500円のくつ下を12%引きで販売

- ① B店のくつ下はいくらですか。

式

(答え)

- ② A店のくつ下は何%引きですか。

式

(答え)

年 組 番 名 前

- ⑥ 下のグラフは、5年1組と5年2組で1か月間に取り組んだ自主学習のページ数と内容の割合を表しています。(式・答え各5点)

取り組んだ自主学習の内容の割合(1組)



取り組んだ自主学習の内容の割合(2組)



- ① 1組の日記の割合は何%ですか。(答え)

- ② 2組が取り組んだ漢字学習のページ数は何ページですか。

式

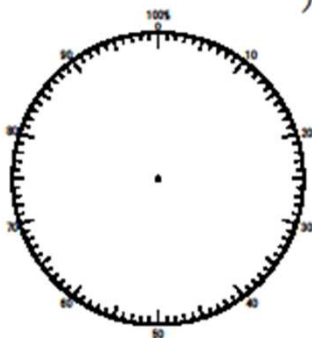
(答え)

- ③ 上の表とグラフを見て、校長先生は「1組と2組では、2組の方が日記を書いたページ数が多いことは、計算しなくてもわかりますね。」とおっしゃっています。校長先生が計算しなくてもわかるとおっしゃるのはなぜですか。理由を説明しましょう。

()

- ⑦ 次の表は、いろいろな理由で学校を休んだ子供の人数と割合です。右の円グラフに表しましょう。(完答10点)

理由	人数	割合(%)
かぜ	15	30
ねっ	12	24
頭痛	10	20
腹痛	8	16
その他	5	10
合計	50	100



5～6年使用

2 分析結果の活用 ②

区施策への反映

【ねらい】

学校別、学年別、教科別のSP表の状況から、課題となる学年や教科を明らかにし、適切な施策・事業の企画・立案等に活用する等、区施策に反映させる。

◇ 教科指導員や学力定着指導員の配置計画や、実施事業の対象者の学力層や教科・内容の検討足立スタンダードの指導内容の追加など、補強すべきところが明確にできる。

- ① 学校別の落ち込みのある教科を明らかにできる。
→教科別の対応を講じることができる。
- ② 区の施策の効果を確認できる。
→効果的な事業を構築することが可能となる。
施策が必要な学力層や教科が明確になる。

2 分析結果の活用 ③

授業改善

【ねらい】

SP表より課題のある単元・領域を誤答を分析することで把握し、今後の指導方法の見通し、手段を合わせて検討、授業改善に役立てる。

- ◇ 誤答分析からの指導計画・授業案の作成
- ◇ 授業改善プランの作成

- ① 前年の学習定着度をクラス単位で把握できる。
→授業の中で感じている感覚をデータで認識できる。
- ② 対策を講じるべき単元や領域を認識できる。
→つまずきを早期に解消することができ、指導計画に反映させやすい。

※問題例を含むため、
著作権の関係により掲載しておりません。

※問題例を含むため、
著作権の関係により掲載しておりません。

※問題例を含むため、
著作権の関係により掲載しておりません。

3 学校におけるS-P表分析のポイント

- ①自校でも採点する。
- ②表計算ソフトでS-P表を作る。
- ③正答率の低い問題を洗い出す。
- ④なぜ正答率が低かったのかを考える。
- ⑤対策を考える。
- ⑥実践する。

この作業が大切！

実践するため
準備が必要

早ければ早いほど良い。